恋愛短編集

東雲よはんそん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋愛短編集

【Ｎコード】
Ｎ７９９６Ｌ

【作者名】
東雲よはんそん

【あらすじ】
＊＊＊望んでいた婚姻だった。愛情のかけらの無い政略結婚。だから、これはきっと自業自得なのだろう。――――『何も伝えない』
＊＊＊帰宅した私の目に映ったモノ、それは、玄関前に置かれたジャック・オ・ランタン――――『君に贈るよ』
＊＊＊学校一の美人、その言葉が似合うのはただ一人。その彼女が俺の目の前にいる。――――『マドンナは微笑む』
＊＊＊王を置いて、俺を置いて逝った騎士。君は今、どこにいるだろう？――――『君は今』

＊＊＊クリスマスムード一色な今日この頃。彼氏の浮気現場を目撃した――――『クリスマス事件』

第一話　何も伝えない１　＊　『何も伝えなかったから、（こうなるんだよ）』

キーワード

中世風　夫婦　すれ違い　アンハッピーエンド

第一話　何も伝えない１　＊　『何も伝えなかったから、（こうなるんだよ）』

望んでいた婚姻だった。
爵位しか誇れるモノのの無い没落貴族にとって、彼女の家が持つ莫大な財産は、彼女の家が商家だという点を考慮しても、手に入れたいと思うには充分だった。

かつて寂れていた屋敷は美しくよみがえり、増員された使用人達が私を迎える。目の前には、妻がいる。
「クレッセ様、お帰りなさい」
妻は、穏やかに微笑んで、帰宅した私を迎えた。私はそれをちらりと見やり、すぐに視線を逸らした。そういう態度の私を、妻がどのような目で見ているのか、私は知らない。
妻が嫁入りと共に持参した財産は、この家を立て直すには充分すぎるくらいで、私は彼女に感謝した。
妻は、私が財産目当てでこの縁談を取り付けたことを知らない。
私は初めから彼女に表面上好意を示して接し、あたかも愛しているかのように見せ続けた。彼女は、そんな私の態度に頬を赤らめ、嬉しそうにしていた。
私は、そんな彼女を嗤っていた。上辺に騙される、単純な女だ、と。

「しばらく家を留守にする」
寝室のベッドに腰掛け、そのベッドで微睡む妻に話しかけた。妻はしばらく私を見つめ、穏やかな、しかし諦めたような笑みを見せた。
「…また王宮に宿泊なさるのですか？」

王宮に泊り込んだことなど、数えるほどしかない。
妻が長男を出産してから、私は彼女に触れていない。そのかわり、外に女をつくった。そして、仕事を理由に外泊し、その女と過ごしている。愛しているわけではない。だが、妻といることが辛いのだ。
「…そうだ」
多少の罪悪感がある。
妻は、私を愛している。なぜなら私以外を愛することを許されないから。
「お忙しいのですね。頑張ってください」
慈愛に満ちた笑顔を向けられているだろう事は簡単に想像がついた。
胸を締め付けられるような痛みを感じた。

いつの間にか、妻に恋をしていた。既に夫婦となっていたのに。
初めは、確かに財産目当ての政略結婚だった。しかし、ともに暮らしていくうちに、彼女の魅力に気付いたのだ。いつも優しく、穏やかに、確かな愛情を一心に向けてくれる妻。その想いに、私の心は満たされていた。

しかし、今更それを伝える術を持たない。
中身の無いアイシテルを何度伝えたのだろうか。中身の無い愛を、何度交わしたのだろう。そして、中身の無いアイを受けた妻を、何度嗤ったのだろう。
今更、本気の愛を伝えたところで、本当の意味で届かせることはできないだろう。
妻は、中身の無い愛を、本物だと信じているのだから。

「どうしたの？　元気が無いわ」
女の言葉に緩く笑い、疲れているだけ、と応えた。そうして、お

前には関係ないのだと、心が嗤う。
「やっぱり、今日は帰ることにする」
薄暗い女の部屋は、殺風景なのにとても圧迫感を感じた。息苦しいくらいのその空間にいて、自分の屋敷の方がここよりもよほど圧迫感があったのに、いつの間にかそれを感じなくなっていた事を思い出す。考えてみると、それは彼女が嫁いで来てから。
「そう、また連絡を頂戴」
もう連絡はしない、と思いながら帰路についた。息子の顔をしばらく見ていない気がする。そうして、妻の穏やかな声を思い出す。
妻に触れたいと、強く思った。

帰宅した私を迎えたのは、慌しく動き回る使用人と、射殺すような目を向ける息子だった。
「お帰りなさい、父上」
12になる息子は、冷ややかな声で言い放ち、一枚の紙を寄越した。
二つ折りにされた紙の宛名には、妻の字で私の名が綴られていた。中身を見る前に息子へ視線を戻す。
「これは？」
「……」
息子は、涙を流していた。
「僕は、一生父上を許さない。母上が許していても、僕は絶対に許さない」
そういって、階段を駆け上がり、やがて乱暴に扉を閉める音がした。おそらく自室へ言ったのだろう。
「……」
許さない、と言った息子は、酷く興奮していた。何かあったのだろうか。そちらが気になり、手の中の紙の存在を一瞬忘れた。そして、息子の元へ行こうとしたとき。

「旦那様！！」
鋭く呼ばれた声に、階上を見上げる。
「どうした？」
蒼白な顔をした執事が、いつもの冷静さを欠いた慌てようで私のもとまで走り寄る。
「奥様が…」
執事は声を詰まらせた。全身を震わせ、瞳は今にも涙を流そうと潤んでいる。
「奥様が、自害なさいました」
一筋の雫が、執事の頬を伝った。

自殺は外聞が悪い。妻は階段から足を滑らせ頭を強打した、という理由をつけて、事故死となった。
葬儀が終わり、呆然としたまま夫婦の寝室を訪れた。ベッドの隅に腰掛け、葬儀の事を思い出す。
屋敷の使用人たちは皆悲しんだ。その様子を見て、妻が使用人たちに好かれていることをはじめて知った。息子も、彼女にとてもなついていた、と今更のように思い出す。
墓に入る前、眠るような妻の顔を見つめ、もう長いこと彼女の顔をまともに見ていなかったことに気付く。
その事実に今更だ、と自分を嗤った。

妻が私に当てた手紙を思い出す。
ベッドサイドに置かれたそれを手に取り、初めて目を通した。

クレッセ様

貴方の瞳が、私を映していないことを、私は初めから存じていました。
けれど、私はそれでもかまいません。ですから、家を立て直せるだけの持参金を持って、貴方に嫁ぎました。

息子は12になります。
まだまだ、親の愛情が必要な年齢かもしれません。それを投げ出す私は、きっと母親失格です。
ですが、家を立て直し、子をなし、血脈を繋げていくという貴方の妻としての役割は充分果たせたのではないかと思います。

私は、自分の心を開放したかったのだと思います。
私が、いくら商家でも多すぎるくらいの持参金と共に嫁いだわけを、少しでも知りたいと思って下さったことは無いでしょう？

迷惑をかけてすみません。
息子の成長を間近で見れないこと、愛情を注げないことが心残りです。
願わくは、貴方が息子へ本物の愛情を注いでくださるように。

最後に、私を妻としてくれて、ありがとうございました。
私は、幸せだったのだろうと思います。

遺書だった。彼女は、全てを知っていた。
そして、私の心を知らぬまま、死んでいった。

「…今更だ」
口に出して呟き、私は私を嗤った。
声が震え、胸が痛んだ。
だが、涙は流れなかった。

第一話　何も伝えない２　＊　『何も伝えなかったけど、（それでよかった）』

望んでいた婚姻だった。
財産はあれど、爵位を持たない商家にとって、彼の家の持つ爵位や歴史は、これ以上無いくらい欲しいものだった。そのための持参金は莫大な金額になったけれど、それすらも気にならないくらい。

＊＊＊＊＊

私の夫となったクレッセ様にとって、この婚姻は単純に政略結婚だったのだろうと思う。けれど、できる事なら恋愛結婚がしたかった。だって、私は彼に片想いをしていたから。

「クレッセ様、お帰りなさい」
微笑んで、帰宅した夫に告げる。彼は、私の眼を見てくれない。私の姿すら、目に入ろうものならすぐに視線をそらしてしまう。
それでも私は、穏やかに微笑み続ける。今、私が妻としてできることはこれくらいしかないから。少し寂しい。でも、となりにたてることが奇跡だった。この寂しさは、幸福の証なのでしょう。

あの白々しい笑みに彩られた、嘘の愛を伝えられても苦しくなるだけだった。
婚約中の間、クレッセ様はとても優しく接してくれた。彼にのぼせ上がっていた私は、彼と目が合うたびに赤面し、ひたすら笑うことしかできなかった。
ただ、いつも別れ際に伝えられる「愛してるよ」という言葉を聴くたびに、心のドコかが悲鳴をあげていたけれど、それを隠して、私は嬉しそうに礼を言い続けた。

「しばらく家を留守にする」
夫が、ゆっくりとベッドに腰掛けながら呟いた。
「…また王宮に宿泊なさるのですか？」
そろそろ、彼を解放するべきなのかしら。ベッドで微睡みながら、ぼんやりと思った。
私が長男、いわゆる世継ぎを出産してから、夫婦仲は冷え切っている。それは当然なのかもしれないけれど。だって、政略結婚における義務の一つは果たしたのだから。
クレッセ様は王宮に泊まらずに、外で女性と会っている。私はそれを知っているけど、何もいえない。その事実を突きつけられるたびに、何も知らない顔をして笑うことしかできないの。
「…そうだ」
そういって、クレッセ様は私に背を向けた状態で、ベッドに横になった。
「お忙しいのですね。頑張ってください」
穏やかに微笑んで、彼の背中に告げた。決してこちらを振り向くことの無い背中が愛おしかった。そして、そこまで想う自分がおかしくて。
ごめんなさい、と心で告げて、知られぬように涙をこぼした。

＊＊＊＊＊

初めてお会いした時から、恋に落ちていた。もうずっと昔の話。
彼は覚えていないだろう。城下町のお祭りで、一人迷子になった私の事を。
私の両親を探してくれた。見つかるまでずっと手を握ってくれて、優しく笑顔を向けてくれた。
あの時の笑顔は、本物だった。
懐かしい夢を見た。幼い頃の初恋の物語。今日、ようやく決心が

ついた気がする。
私は、朝から私室にこもって手紙を書く。思うことは、クレッセ様と息子のこと。どうしてこうなってしまったのだろう、と私はぼんやりと考える。そうしてたどり着く答えはいつも同じで。結局、身分違いの恋をした私がいけなかったの、と。
「母上？」
息子の呼び声が聞こえて、書きかけの手紙を隠して息子を迎える。
「どうしたの？」
「母上がずっとお部屋にいるから…具合が悪いのかと思って」
「お手紙を書いていたのよ。貴方はまだ、お勉強があるのでしょう？　心配しなくても大丈夫よ」
「…はい」
少し心配そうな顔をしながら、しぶしぶ勉強に戻る姿が可愛い。私の心配も本当だろうけれど、きっと勉強も嫌だったのね。そう思うと自然と口元が弛む。
優しい子。愛おしい、私の息子。できる事なら、もっと成長していく姿を見たかった。
扉が閉まる音を聞きながら、再び手紙を書きはじめた。

新婚の頃は期待もあった。けれど、そんなものはもう昔に無くなってしまった。
今、胸にあるのはクレッセ様への愛情、罪悪感、共にいれた事への感謝。息子への愛情。そして、幸福。
私は幸せだったのでしょう。愛する人と結婚をした。愛する人との間に子供を儲けた。これで、愛する人から愛されたい、と願うのはわがままだと思うから。
心残りがあるとするなら息子のこと。普段、息子と距離を置いている方だから、これからが少し不安。
けれど、今伝えたいと思うのは、感謝。
ただ、ただ、ありがとう、それだけ。

＊＊＊＊＊

息子を想うのなら、なぜ、と貴方は考えるかもしれません。
私の心は限界にきているのだと思います。けれど、貴方と結婚して、後悔する事なんて一つもなかった。
ただ、つらかったのです。耐えられなくなるくらいに。
手紙に記した最後の言葉は、私が残した、ほんの少しだけの本心。
幸せでした、と断言できるほど幸せではなかったの。
幸せなのだと、そう思い込んで得た幸福だったの。

貴方はそれに、少しだけでも気付いてくれていたでしょうか？
私は、本当に、私だけが貴方を追いかけていたような気がするのです。

第一話　何も伝えない２　＊　『何も伝えなかったけど、（それでよかった）』

第一話完結です。

去年の冬に書いたものをたまたま発見したので乗せてみました。
こういうすれ違いの末の悲恋って、結構ありますよね。なので、ちょっと迷いましたが、せっかくなので。

本当は息子視点も書いたはずだったのですが、見当たらず……。

第二話　君に贈るよ１（前書き）

キーワード
現代　社会人　恋人未満　年の差　ハロウィン　ジャック・オ・ランタン

第二話　君に贈るよ1

「何これ？」

この場にいるのは私だけだというのに、思わず呟いてしまうくらいは衝撃があった。

帰宅した。

確かにここは、私の住むマンション。私の部屋番号。玄関の前。

目の前にあるのは、オレンジ色のカボチャで出来た、ジャック・オ・ランタン。

「……何これ？」

何かはわかってる。けれど、おんなじセリフしか出てこなかった。

＊＊＊＊＊

社会人になり、始めた一人暮らし。家に一人きり、という状況は初めこそ楽しかったけれど。

「……なんか、さみしいなぁ」

仕事をして、疲れて帰って家に一人。これからご飯を作って、お風呂を沸かして……。

そういう毎日に疲れてしまうのは早かった。

（寂しいなぁ……しかも、一人って自分のことがおろそかになるよ）

そう思いながらも、４年目を迎える一人暮らし。身体は勝手に慣れてしまった家事をこなしている。そんな自分に、また空しくなって。

そういう悪循環に陥ってるような感覚は、私の心を疲弊させる。

慌しく洗い物をしているうちに、出勤の時間。

「今日も仕事か……」

寂しい独り言を呟いて、玄関の扉を開けた。

「戸賀先輩。今日は弁当じゃないんすか？」

昼休み。

財布を持って席を立った私に声を掛けてきたのは、私の４年後輩の宮浦誠一君だった。

入社して４年。後輩を教える立場になり、私は宮浦君の指導を任された。

私の責任も大きくなったんだなぁ、と他人事のように思った。

「そう。今日はなんか慌しくて、疲れちゃって」

「珍しいっすね。でも、たまには外食するのも気分転換になりません？」

そういって、私を覗き込むように近づく宮浦君。どうでもいいけど、近すぎる気がする。

「そうかもね。宮浦君、ちょっと離れて。通れないから」

机と机の間の通路を塞ぐように立つ彼に、ちょっと迷惑そうに言ってやった。

宮浦君は、ちょっとつまんなそうな顔をして。

「先輩には俺の顔って通用しないんですか？」

と、何ともまぁ、自身に溢れたお言葉をおこぼしあそばせた。

「何を言ってんだか。それから、社内では僕、もしくは私、という事を心がけなさい。仮にも営業なんだから、ポロっと俺、なんて言ったらちょっと問題よ」

軽く流して、ちょっと小言を言って彼の横を通り過ぎようとしたのに。宮浦君は私の腕を掴んで引き止めた。

「自分で言うのも難ですけど、結構、僕、の外見は整ってるみたいなんですよね。だから、」

「だから、貴方になびかない私が不思議、ってこと？　もういいでしょ。お昼休みが終わっちゃう」

口調を直して、そうしてまだ私を通してくれない宮前君。僕、を強調するように言う彼に思わず苛立ってしまう。

そしてそれを隠さないまま話をさえぎり、無理矢理会社を出た。

疲れているのか、すごく気持ちにムラがあると思う。さっきまではなかなか前をどいてくれない宮浦君に苛立って、今は、理由も無く沈んでいる。

「……疲れた」

カフェでサンドイッチをつまみながら、こぼれるのはため息。
ここ数日は残業続きだった。
新人の子が大きなミスをしたらしく、社内は慌しくなっている。その状況で、自分の仕事はこなした、と毎日堂々と定時に退社していくのが、2年後輩の女の子。
可愛らしい外見の彼女は「今日〜、彼氏が待ってるんですよぅ……」と口癖のように言う。それは、こちらを苛立たせるためとしか思えない。
そして最悪なのは、彼女の仕事はミスが多い。
その尻拭いは私にやってきて。毎日、自身の仕事と彼女のカバーでなかなか帰れない日々が続いている。

（身体がだるいな……）

体調を崩しているのは分かってる。
けれど、無理をしなくちゃならない、と思ってしまう。
それと同時に、家に帰りたくない、とも。

結局、今日もまた残業になった。
一人、また一人と退社していき、社に残ったのは私と課長の二人だけ。

「戸賀さん、終わりそうかな？」
「……無理ですね。課長はお先にお帰りください。今日は金曜日ですから、お子さんも待ってるんじゃないですか？」
「でも、部下が頑張ってるから」
「私なら大丈夫ですよ。多分あと30分あれば、何とかなりますから」

確実に３０分では終わらない。けれど、意地でも何とかしてやる、という気迫をこめて言った。それを感じたのか、課長は苦笑しながら、帰宅の準備を始める。

「じゃぁ、お言葉に甘えるよ。……それにしても、琴田さんは考え物だな。今度注意しないと……」

琴田さん、というのは例の定時退社する2年後輩の女の子。
課長は渋面をつくっていたが、こちらを見てニコリと笑う。

「お疲れ様。先に失礼するよ」
「はい、お疲れ様でした」

課長が帰って、本当に一人きりになって、また憂鬱になる。

「うわ……私、何これ、こんなに一人が嫌いだったっけ？」

言いながらも、ひたすら手を動かし続ける。
けれど、昼間に感じていた体調の悪さもぶり返して、ついには手が止まってしまった。

「休憩しよ」

廊下にある自販機へ、コーヒーを買いにいった。

デスクに戻ると、パソコンの前にオレンジ色の包みがあった。
可愛らしいジャック・オ・ランタンのイラストが描かれたそれは、どうやらキャンディーみたいだった。

席に着きながら、それを手に取る。

「……誰だろう？　てゆうか、もうすぐハロウィン？」

残業続きで疲れていた。

カレンダーを見る余裕なんか無くて、今日が何日なのかを思い出せない。

「知ってますか？　明日はハロウィンなんですよ」

第二話　君に贈るよ１（後書き）

次で第二話完結です

第二話　君に贈るよ2

「知ってますか？　明日はハロウィンなんですよ」

驚いて後ろを向いた。

立っていたのは2時間近く前に退社したはずの宮浦君。

その手には机に置かれたものと同じキャンディーを持っていて、見せるようにこちらに振った。

「……帰ったんじゃなかったの？」

「一度帰りましたけど。用事は済んだので、サービス残業でも、と思って」

にっこり笑った宮浦君は、本人が言うだけあるのか、確かに魅力的だった。

疲れているときに、こうやって優しくされると、すごく胸に響いた。

「なんか、今だったら私、宮浦君の外見にほだされそうだわ」

「ほだされてみませんか？」

冗談で言ったつもりだった。

間髪いれずに返ってきた言葉は思った以上に真剣そうで、呆気にとられた。

「今、残業中で気が立ってるから、そういう冗談はやめてね」

「……」

ぼそりと何か言ったけど、小さすぎて聞き取れない。
「なんて言ったの？」
「いえ？　なんでもありませんよ。それより、仕事、手伝います」
真面目な顔をして、私の隣の席に着く。
少なくなってきた書類を手に取り、パソコンを立ち上げ、こちらを見上げる。
「……あと、少しで終わるから……」
「少しなら、僕にやらせてください。その間は休んでて。先輩、顔色が悪いですよ。心配していたんです」
にっこりと笑って、早速始めてしまう。
私は結局、その言葉に甘えることにした。
宮浦君がキーボードを叩くのを横目に、さっきのキャンディーを口に入れた。
パンプキンプリン味で、甘ったるい。けれど、その甘さが疲れた身体には心地よかった。
「先輩、明日……ちょっとだけ僕に付き合ってくれませんか？　休日ですし」
横から聞こえた声に、休みたい、とは思ったけれど。
こうやってわざわざ仕事を手伝ってくれている。
「いいよ。今日は手伝ってもらってるし」
「よかった。……多分、あと２０分くらいで終わります」

宮浦君の指導を始めてから約半年。４月とは違って、とても頼りになる。

「……なんか、成長したねぇ……」

しみじみと呟くと、宮浦君は笑い出した。

「ちょっと、おばあちゃんみたいな物言いしないでくださいよ」

「入社当時の君と比較しちゃって」

「先輩に指導してもらえたからですよ。ついていこうと必死でした」

その言葉を最後に、室内は静かになった。

カタカタと、キーボードの音だけが響く。その音に、私は不思議なほど安心した。

（一人じゃないって、思えるからかな……）

「終わりました。先輩、帰りましょう」

いつの間にかウトウトしていたらしい。

宮浦君が、軽く私の肩を叩いた。一応起きたけど、非常に眠い。

「疲れてるんですね。車で来たので、その中で休んでください」

とにかく眠かった。

促されるまま、駐車場まで行き、助手席に座り、眠ってしまった。

自宅を知らせないままに。

「先輩、起きてください。着きました」

また同じように軽く肩を叩かれた。

目を開けて、私の住むマンションの目の前に車が止まっていることに気付く。

「……なんで私の家を知ってるの？」

車を降りて、エントランスに入りながら聞いた。眠気なんかは一気に吹っ飛んでいる。

宮浦君には一度も家を教えたことは無い。

「やっぱり、気付いてなかったんですね」

何が？　私は声に出さないまま、先を促した。

「俺、同じマンションのいっこ上の階に住んでるんすよ」

意地悪そうに笑う顔。口調も注意する前に戻っている。

「俺は、すぐに気付きました。だって、先輩のこと、好きだし」

サラリと言われた言葉に、反応できない私を宮浦君は面白そうに眺めて、行きましょう、と私の腕を掴んでエレベーターへと促された。

「……」
「先輩、一人が嫌いでしょう？」
エレベーターの中で、唐突に言われて驚いた。
「何で……」
「なんとなく。見てれば分かりました。……好きですから」
好きですから。
どう答えていいのか分からない。そもそも本気なのかも分からない。
「先輩は俺の事、そういう対象で見てないんすよね。でも、これからは考えてみて欲しいです」
「……」
答えられないまま、５階に着いた。
扉が開くと同時に、逃げるようにエレベーターから降りる。
「俺、簡単には諦めませんよ」
その言葉に振り返ると、意地悪そうに笑う顔が扉の向こうに消えていった。
＊＊＊＊＊
「なんか、すごい疲れた……てゆうか、このカボチャ。宮浦君、何考えてるの？」

ジャック・オ・ランタンの犯人は宮浦君だった。
置手紙があったから。
【こいつ、明日使うのでちゃんととっておいてくださいね。出来たら、帰ったら連絡ください。明日の事も話したいので。　宮浦誠一】
署名の下に、携帯電話の番号がある。
散々迷った末に、電話を掛けようと思った。カボチャと明日のことが気になったから。

『はい、宮浦です』

数コールの後、聞こえた声は仕事用のそれだった。

「あ、戸賀です。カボチャにメモがあったから、電話しました」
『あぁ、電話してくれたんすね。嬉しいです』

とても嬉しそうな声だった。
その声を聞いて、私の気持ちが高揚した。

「あのカボチャ、どうしたの？」
『俺の実家、農家なんです。で、ハロウィンだから、とカボチャを送られて。せっかくだからつくりました。上手く出来てるでしょう？』
「上手くは出来てるけど……」
『俺、料理も結構好きなんです。明日、そのカボチャもって食べにきてください。誰かにつくってもらうって、一人暮らしだと無いでしょう？』
嬉しい、と素直に思った。
『俺、諦め悪いんです。とりあえず、時々一緒に食事をする仲から始めません？』

「……ありがとう」

疲れてはいたけど。でも、それを上回るぐらい明日が楽しみだった。

明日は楽しい一日になりそうだ。

第二話　君に贈るよ２（後書き）

第二話完結です。
これも１話同様、昔書いたもので、しかも季節感をがん無視しています。。
みなさんすみません。

第三話　マドンナは微笑む　1（前書き）

キーワード
学校　教室　幼馴染　告白

第三話　マドンナは微笑む　1

学校一の美人。
そんな言葉を言われても違和感が無いのは、この学校で一人だけ。
清水亜貴。
学校中の男子生徒を虜にして、普段から告白される事が多い。それが行事ともなれば、ひっきりなしに呼び出され、体育館裏、人気のない廊下、使われてない教室。いたるところで暑苦しい愛の告白を受けているはずだ。……それがなぜ。

「ねえ、付き合ってよ」

なぜ俺の目の前にいるのか、俺には理解できない。
いつも人に注目されている女。
そして今日は文化祭だ。
毎度のことながらひっきりなしに呼び出されて、いたるところで暑苦しい愛の告白を受けているはずで。
なんで、こんな普通の教室の中、誰にも気づかれることなく平然と俺の前に立っているのだろう。

「ねえ、私の話、聞いてる？」

聞こえている。これだけ至近距離で話しかけられれば、嫌でも聞こえる。
日差しがオレンジに変わろうとしていて、来場者も段々と減りつつある。
俺はどのクラスにも一人はいる、協調性の無い、影の薄い、平凡

な男子生徒。
読みかけの本を、文化祭中は使われない自分のクラスの自分の席で、淡々と読んでいた。

「ねえ、土屋君」

もう一度呼ばれて、ちらりと視線を清水に移す。
俺の前の席をこちらに向けて、ひとつ挟んだ机に身を乗り出すようにしてしている清水は、俺の視線を受けて二コリと笑った。

「付き合ってよ、土屋君」

付き合って。
もう一度言って、清水はとても魅力的な表情で俺を見ている。
役者になりたいのだと、風の噂で聞いた事がある。
ぴったりだと思った。
清水には、テレビが似合う。テレビに出なくても、きっと舞台でも映える。
人を引き付けるモノを持っている。
そんな女から、付き合って、と言われた俺は。
比較して、内心で自嘲した。
つりあうわけが無いし、こんな、周りの視線を釘付けにするようなのと付き合えば、きっと自分はいろいろなモノにつぶされる。

「流石役者志望。一瞬本気かと思ったよ」

俺の言葉に、清水は泣きそうに顔を歪めた。
俺は視線をそらして、また本のページをめくる。

「私の気持ちを知ってるくせに、ひどいよね土屋君」

「……俺の何処が良いんだよ。俺にはお前の気持ちがさっぱりわかんねぇ」

がたん、と音がしてもう一度視線を上げた。
椅子が倒れていて、ひとつ挟んだ机に両手をついた清水が、俺に覆いかぶさるようにして、こちらを見ている。
挑むような目をして言った。

「晴ちゃん」

懐かしい呼び方だった。
こいつの口から、もう一度そうやって呼ばれるなんて想像もしてなかった。

「晴ちゃん」

見上げる俺の頬に水滴が落ちる。
清水は泣いていた。

「好き」

俺は言葉を返さない。
……いや、返せない。

「好きなの、晴ちゃん。……ありのままの私を見てくれて、私を普通に扱ってくれるのは晴ちゃんだけ」
「……」

何も返さない俺に、もう一度、晴ちゃん、と名前を呼んだ。
ぽたりと涙を落として。

「好きなの」

耳元で囁くように零した言葉は、そのまま俺の深いところまで吸い込まれる。

好きなの、と言った唇が俺の頬に触れて。

「……ごめん」

最後に一言謝った清水は、そのまま教室を去っていった。

それを見送りながら、思う。

幼馴染の彼女はどこまでも一途なんだな、と。

小さな頃からずっと、俺だけを追いかけてきている。

こんな、何のとりえも無い、格好良くも無い、土屋晴一というただの男子生徒を。

「……俺は、こんなに思われる資格なんて無い」

平凡な俺は、プライドだけは高くて、どんどん美しくなる清水に嫉妬して、自分自身の劣等感も大きくて。

本当は、言葉にできないくらい、狂おしいほどに彼女を思っているのに。

こうやって、告白されても。

劣等感と嫉妬が邪魔をして言葉にならない。

そして、俺は周りを恐れてる。

仮に付き合い始めたときの、周りの反応、俺への態度。

こんな俺を選んだ事に対する彼女への反応も心配だけど、それよりもまず自分を心配してしまう。

最終的に。

どこまでも、自分が一番可愛いんだ。

「こんな、俺をどうして好きだなんて言えるんだよ」

清水の去った扉を見つめる。

亜貴、と声には出さず名前を呼んだ。

第三話　マドンナは微笑む　1（後書き）

2は少し間が空くかもしれません。
申し訳ありません。

第三話　マドンナは微笑む　2

「晴ちゃん」

私の呼ぶ声に彼は応えない。
彼が抱く、劣等感を私は知ってる。
私をどこか遠ざけようとしていることも。
だけど私は彼を呼ぶ。

応えてくれるまで。
何度でも。

＊＊＊＊＊

「あんな奴の何がいいの？」

悪趣味な人間はどこにでもいる。
学校で一番モテる男子だと噂されているのは私も知ってる。私とセットで美男美女カップルと呼ばれていることも。
あの文化祭の日、夕焼けに染まろうとするあの教室の中。
この男は私と晴ちゃんのやりとりをこっそりと覗いていたらしい。
あれから一週間が経つというのに、顔を合わせるたびにしつこく付きまとう。

「何の用？　坂城君」

どんな返答が来るかわかりきっているのに、聞くのは正直面倒くさい。
だけど、彼と私はクラスが一緒なら委員会も一緒だから。ある程度妥協しなければやっていけない。
誰もいない、放課後の部室。
他の教室からは少し離れていて、人の気配も全くない。唯一図書室が近くにあるけれど、放課後にわざわざ本を読むモノ好きもあまりいないだろう。

「土屋の事だよ」
「またその事。坂城君には関係の無い事だって何度も言ったはずだけど」

高校に入ってから、何度か告白された事がある。
そういう時、どこから情報を得ているのかしれないけれど、坂城君は気持ち悪いくらいに私にかかわる恋愛がらみの事を知り尽くして、根掘り葉掘り聞こうとする。
それにしても、今回はしつこいと思った。

「関係ないって思うのはおかしいんじゃないか？」

私からしたら、あんたには関係ない、その一言に尽きる。
何をどう思って、彼はおかしいと感じたのか私にはわからない。
だって、関係が無いはず。

「俺たちが周りからどう呼ばれてるか、知ってるだろ？」
「だから？」

知っていたから、何だというの。
周りが勝手に言っているだけで、私たちには関係ない。

「美男美女のお似合いカップル」
「そう言ってるね。私はその人達の目が腐ってると思うけど」
私の答えに、坂城君は顔をしかめた。
それを見ながらにっこりほほ笑んでやれば、ますます眉間にしわが寄る。
「俺もそう思うんだよね」
「だから？」
「わからない？　俺たちは付き合うべきなんだよ」
今日ほどこの男をあほだと思った事はないかもしれない。
告白とかをすっ飛ばして、付き合うべき、と来た。
この男が何を思ってるのか、手に取るようにわかる。要は、格好いい自分が好きで、そんな格好いい自分の隣には可愛い女の子がいるのがふさわしい。そしてそれは、自分の魅力を引き立てる。きっとそう考えているのだ。
どこまでも、自分が可愛い坂城君。
私は嫌だ。
「絶対いや。私にとって、坂城君は美男じゃないし、私自身を美女だとも思ってない」
「……」
「私にとっての美男は土屋君だけだし、私を美女だと思うのも土屋君だけでいい」
「……」
「坂城君、ナルシストもほどほどにしないとみんなから引かれるよ。現に私はどん引きだし」
「……い」

「そもそも、付き合うのはお互いがお互いに好意を持つ者同士でしょ？　坂城君は私の事が好きなんじゃない。私を隣に連れて、お似合いカップル、と周りの視線をくぎ付けにする自分が好きなんでしょ？」

今までのうっ憤もあって、しゃべりだしたら止まらなかった。
元々、人に悪口とかは言わない方だから、こんな自分に私がびっくり。
そして。

「うるせーんだよ！！！！」

いきなり大声で叫んで、私を押し倒した坂城君にもびっくりした。
ガタンッ、と激しい音がして、坂城君の足が、横の机を蹴り倒した。
それが君の本性なんだ？
頭では冷静に思ったけれど、体が強張って、私が感じる恐怖を如実に坂城君に伝えている。
彼は嫌らしい笑いをこぼした。

「……清水ってさ、俺を全然意識してなかっただろう？　でも、俺を男と意識しないから、こんな事になるんだよ」

耳元で囁くように言われて、坂城君の手が太ももを這い上がり、スカートに手をかけた。

「亜貴」

そう呼んでいいのは、坂城君じゃない。
私の事をそうやって呼んでいいのは、一人だけだ。

「やっ」
「お前はいい加減にしろ」
平坦な声が上がったと同時に、私の上にいた重みが無くなった。
恐る恐る起き上がると、坂城君は自分が倒した机の上に倒れて、おなかを押さえている。
「行くぞ」
呆然とそれを見ていた私の手をとり、彼は私を図書室に連れ込んだ。
図書室の奥、ほとんど人目につかないような本棚の影まで連れてこられて。
突然抱きしめられた。
「あんまり心配かけんな」
「……」
私に回る腕が優しくて、強くて、暖かくて。
涙があふれた。
肩に顔を押し付けると、優しく頭をなでてくれる。
「亜貴」
ああ、この声。
私をそうやって呼んでいいのは、晴ちゃんだけ。
「……好き」

呟く声に、一瞬頭をなでる手が止まったけれど。それはまた優しく再開された。

「晴ちゃん、好き」

ぎゅう、と力いっぱい抱きしめられて、頭のてっぺんに何かが触れる気配がした。

「……知ってる」

上から降る言葉は、私の想いに答えてくれるモノじゃないけれど。
その仕草が、私の想いに答えてくれる。

「好き」

もう一度言って、潤んだ瞳はそのままで晴ちゃんを見上げた。
少し赤い顔をして、困ったように視線が泳ぐ。
ほほ笑む私を見て、色々な複雑な感情を浮かべるけれど。
結局は私に向かってほほ笑んでくれる。

まだ応えてくれる事はないけれど。
何度だって名前を呼ぶ。
何度でも伝えるよ。
貴方が応えてくれるまで。

第三話　マドンナは微笑む　2（後書き）

第三話完結です。

第四話　君は今（前書き）

キーワード：中世風　騎士　忠誠　悲恋

第四話　君は今

彼女はとても強い人だ。
貴族の娘でありながら騎士を目指し、周囲の反対を押し切り、実家と縁を切って、本当に騎士になった。
その美しい顔に傷を作り、その美しい手に肉刺を作り、とても頑張っていた。
俺は、そんな彼女を目映い光のように思っていた。
その彼女は今、俺の目の前で眠っている。
右腕を失くし、胸から腹にかけてを大きく切り裂かれ、口からは血を流し。
宝石のように輝いていた瞳は光を失くして。

「シェリファーナ」

俺の声に応えない。
彼女の左腕には折れた剣。
国王が彼女に贈ったものだ。
戦場で、折れた剣を抱えたシェリファーナは沢山の屍の中の一つになった。
それでも。
それでも彼女は誰よりも強くて美しい人だった。
手の届かない、最愛の人。

＊＊＊＊＊

「私ね、騎士になりたいの」

両親と激しい言い争いをしたという彼女は、家を飛び出して夜中に俺の家に来た。

俺の家は王城のすぐそばで、彼女の家からは徒歩で15分くらい。

彼女は何かある度に俺を訪れ、一通り愚痴って少し泣き、そして訓練をして帰っていく。

初めてあった時に、変わった娘だと思った。

幼いながらにも目を見張る美貌、そして早くも王太子の妃候補にも上がるほどの上位の貴族の娘でありながら、騎士の訓練場を訪れて、ただただじっと訓練の風景を見ていた。

同じく訓練を見ている俺の横で、飽きることなく。

ずいぶんと探したらしい彼女の従者が連れ帰るまで、ずっと。

「だから、明日、城で行われる入隊試験に受けようと思う」

彼女はきっと騎士になるだろう。俺と共に学び、その実力は嫌というほどわかっている。

そして実際に騎士になった。

一時期は俺の部下としても働き、目覚ましい成長を遂げて。

時には大けがを負い、しばらく医務室で入院生活も送っていた。

その間に、俺は一度だけ見舞いに行った。

白い寝台の上で、痛々しい姿でありながら、訪れた俺を嬉しそうに迎える。その彼女に思わず疑問をぶつけてしまう。

「なぜそこまでして騎士であり続けようとするんだ？」

このときの彼女は20歳を超えて、貴族の娘としては完全に結婚の適齢期を外れていた。

「私ね、ハイン様が好きなの」

この国の、かつての王太子。

今は王になり、その横には美しい王妃が寄り添う。

「叶わないのはわかってる。だから、ハイン様のためにこの命を捧げたいの」

王は王妃を心の底から愛している。側室は持たない、と婚礼の際に宣言していた。

かつて、妃候補にまで上がっていた美貌と地位を持った貴族の娘は、地位を捨て、美貌に傷を作りながら、他人の命を奪う代わりに最愛の者の役に立つ道を選んだ。

茨の道だ。

この命を捧げたいの。

彼女が言った言葉は本心だろう。本当に、その命すら捧げてしまう。戦場で、自らが奪った命と同じように、誰かに奪われてしまう。

それが本望なのだと。

彼女はそう言っている。

静かな決意を秘めた瞳を前に俺はただ、そうか、とだけ相槌を打った。

＊＊＊＊＊

彼女の葬儀は壮大に行われた。

王は終始表情を変えることなく、冷静な目でそれを見ていた。俺は、その斜め後ろで運ばれていく彼女を見送った。

「……逝ってしまった」

その夜、俺を私室に呼んだ王は顔を見るなりそう呟いた。

「……幼き頃より共に育った者たちは皆、私を置いていく」

アルコールに弱い、若き王は珍しく酒を口にしている。

豪華な装飾、高価な家具、広く美しい、王にふさわしい室内。その中にいる王は孤独に見えた。

「お前もいづれ私を置いて逝くのだろう」

「……私は王に忠誠を誓っております故、必要とあらばこの命も捧げます」

「……もう、私とお前だけしかいない」

王は呟き、静かに涙をこぼした。

王を含めて、幼馴染と呼べる者は六人居た。そのうち、二人は戦場で死に、一人は暗殺、シェリファーナは、王の信頼を得たことを疎ましく思う仲間の刃に倒れた。

皆、王に忠誠を誓っている。だからこそ、死期を早めたと、王はそう思っている。けれど、誰もそれを後悔はしていない。

「なんで、騎士になった。……シェリファーナ、なぜ……」

嗚咽のような呟きに俺は目を伏せた。

シェリファーナ。
名前を呼ぶ。
お前が王の騎士であるように、俺もまた、王の騎士だ。
目の前で涙を流す若き王。
この心優しき王の剣であり、盾でありたい。
お前が思った事を俺も同じように思った。
俺の人生は王に捧げよう。
俺の心も王に捧げよう。
いつか、俺が役目を終える時、もう一度お前に会えるのなら。
愛してる。
この想いだけはお前のものだ。

シェリファーナ。
お前は今、どこにいるだろう？

第四話　君は今（後書き）

……。

色々と矛盾とか、微妙なところとか沢山ありますが、あえてこのまま掲載します。
そのうち手直しできればと。
しかも第一話と話がかぶってる気がしてしょうがない。
もうちょっと私のレベルが上がったら修正したいです。

第五話　クリスマス事件　前編（前書き）

キーワード

クリスマス　浮気　決意　出会い　職場の同期　ハッピーエンド

第五話　クリスマス事件　前編

世間はクリスマスモード一色な今日この頃。
残念なことに、私は彼氏の浮気現場を目撃した。

「どーゆうことよ！　ちょっと、彩子！　あんたなんとも思わないの！？」
「……なんてゆうか、ビックリした」

今から4時間前の夕方6時。
今日から好きな雑貨屋さんがクリスマスセールをする、というのを知って仕事終わりに友人の愛海と待ち合わせをした。
二人で雑貨屋さんを回り、ついでに最近話題になっていた服屋さんを覗いて、ご飯を食べようか、という話になったのが、2時間半前の7時半。
平日だったのが幸いしてか、飲食店は空いていた。私達が好きなパスタのお店で、今日の戦利品について思う存分語り合って、お店を後にしたのが30分前の9時半。
たまたま、ものすっごい可愛わいい女の子を見かけて、その横にいる男を見たら、私の彼氏と判明したのが25分前。
後をつけて、まぁ、そういった目的の方々のお泊りあそばせるホテルへ入っていくのを目撃したのが、15分前。
呆然とする私を、ものすごい勢いで引きずり、近くの居酒屋――運がよくて、ここも空いていた――へ入ったのが10分前。
そして、現在。
愛海は完全に頭に血が上っている。

「彩子！！　あんた、彼を寝取られてるんだよ！？」
「……そうなんだよね。なんか、実感が……」

「実感も何も、目の前で目撃したでしょうが！！！」

ごもっとも。だけど、内心ではやっぱりなぁ、と納得してしまう部分があった。

そもそも、私の彼、今田慎一は大学時代からの付き合い。実際の交際年数も5年近く。それだけの付き合いがあれば、相手の事などそこそこわかってくる。

今田慎一という人間は、どこか異性に甘かった。

それは私という彼女がいても同じ事で、女の子と丸一日二人っきりで遊びに行く――本人は、友人と遊びにいく、と言い張ったが、表現としてはデートが正しいと思う――のは日常茶飯事。それが理由で、私との約束を断られた事だってある。

いつか浮気されて捨てられるかも、という思い常に頭の片隅にあった。だけど、どこかで遊びには行っても、浮気はしないでくれるだろう、と勝手に期待もしていた。……というか、普通、誰だって思うだろう。まぁ、見事に裏切られたわけだけれども。

「お待たせしました、枝豆とホッケ、生ビール中ジョッキ2つになります」

「あ、来た。よし、今日は語るよ！　ってゆうか、自棄酒よ！　愚痴大会よ！　ホンットいらいらするわー」

「うん、そうだね。……あ、ホッケ、すごいおいしそう」

裏切られたけれど、思った以上にショックはなかった。たぶん、だいぶ前からいろんな事を諦めていたからかもしれない。それでも、別れる気は起きない。決定的な別れを切り出されない限りは。

「あんたさー、健気だよねぇ。健気を通り越して、馬鹿じゃないの？　って思うときがあるよ」

「そう？」
「うん。別れようとは思わないの？」
「向こうが言ってこない限りは」
「なんでよ」
「好きだから」

そう。付き合い続けているのは、好きだから。単純だけど、もっとも大きな理由。
浮気されても、約束を破られても、別れる、という選択肢が出てこないくらい好き。

「そう言ってる割には、あんたって淡白よね」
「うん、慎一君に関しては自覚してる」
「あっそう。……あ、すいませーん。石焼そば半熟卵のせ？ってゆーの追加で。それから生ビールも。あ、あとこのお好み焼きも」

淡白、と似たような言葉を慎一君本人からも言われたことがある。
なんて言われたんだっけなぁ？

テーブルに置かれたホッケを突きながら考える。
言われた時は結構ショックだった。それは覚えているけれど、肝心の言葉のほうは思い出せない。
傷ついた、という記憶は残っているのに。

「聞いてんの！？　彩子！」
「……何？　聞いてなかった」
「ケータイがなってる、って言ったのよ！」

いまだに興奮が冷め切らないらしいのか、言葉の端々にそれが出ている。

「ホントだ」
「まったく、……すいませーん。ビール追加でー」
ペースが速い愛海を横目に、ケータイを開く。
メールを一件受信している。相手は、今田慎一。
「……慎一君だ」
「なんてきたの？」

『話がしたい』

居酒屋に入ってから、一時間が経っていた。

＊＊＊＊＊

「ごめん、いきなり呼び出して」

あれから私は、愛海にメールの内容を話し、彼女の激励を受けながら待ち合わせ場所へと向かった。
場所は、いつも待ち合わせに使っていた、私の家の最寄り駅。
行ってみると、慎一君はもう、そこで私を待っていた。
「大丈夫。どうしたの？　慎一君から呼び出すなんて珍しい」
本当に珍しい。初めのころは、お互いがデートに誘っていたけど、

だんだん私からの一方的になり、最近は誘うことも少なくなった。
……誘ったところで、断られることもしょっちゅうだったけれど。

「話がしたくて」
「メールでも書いてあったね」
「……ちょっと、公園に移動しよう」

公園は、駅から歩いて１０分くらい。
そのあいだ、ずっと無言で重苦しい雰囲気だった。唯一した会話といえば、途中の自販機で飲み物を買ってくれたときに「何がいい？」「……ココア」。これだけ。
公園のベンチに座って、プルタブをあける。
居酒屋へ入ったときよりも外はだいぶ寒くなっている。あけたココアの缶から白い湯気が出てる。私の息も白い。
慎一君は、私の横に座って、さっきココアと一緒に買った缶コーヒーをじっと見つめてる。缶を開ける様子はない。

「あの、さ」
「うん」
「今日、セルティガの店の辺りにいた？」

セルティガ、というのは私と愛海が好きな雑貨屋さんの名前。当然、慎一君も知っていた。

「うん、そこで買い物したから」
「……誰か、見た？」

探るように、ものすごく遠まわしな言い方。普通に聞けばいいのに。

『お前って、いつも冷静で、感情を出さないし、つまんない奴だよな。俺がもし浮気しても、絶対取り乱さないだろ』

唐突に思い出した。そうだ、慎一君に、そう言われた。

そのとき、私はすごくショックを受けたけど、同時に、憤りもしたんだ。

だって、はじめは感情なんか駄々漏れに近かった。慎一君だって、考えてることがすぐわかる、って言ってたくらいだから。

私がつまんない奴になってしまった理由は、慎一君にもあるんだよ。

期待することをやめて。

諦めが早くなって。

冷静でいるよう努力するようになった。

その理由は。

決して私一人の問題ではなかったはずだ。

「見たよ。慎一君を。ラブホテルの前で、知らないきれいな女の人と一緒のところ」

「ごめん！」

「うん」

「……」

「？　どうしたの？」

「……いや、なんでもない」

「そっか」

「……俺、酔ってたんだ」

「そう」

「で、全部終わってから正気に返って……」

「……」

「ほんとごめん！」

「うん、だからいいよ」

「……いいの？」

謝っておいて、と思う。顔色を伺うように私を見て。許す以外にどうすればいいのか。

「なんでそんな簡単に許すんだ？」

「じゃぁ、どうしたらいいの？　過ぎたことでしょ。どうにもならないし。反省してるなら、別にいいよ」

言いながら、自分が虚しくなった。

物分りのいい愛人みたいだ。ちゃんとした彼女のはずなのに。

「お前、ほんと冷静だな。だけど、それでよかったよ。取り乱されたらどうしよう、ってちょっと心配だったから」

そう言った顔は、すっきりとしていて、最後の心配だった、のくだりでは本当に嫌そうな顔だった。

最低男。

心の中でつぶやいた。

すごく好きな人。浮気をされても、別れようと思わないくらい。

でも、本当にそうなのかな？

単純に、面倒だと思ってるだけな気もする。

私の精神面に、悪い影響を与えてくれる人。

別れるべきかもしれない。いい加減に。

「仲直りに、クリスマス、どこか行こうか？」

それは唐突な申し出。慎一君からの誘いなんて、本っ当に久しぶり。

うれしいはずなのに、どこか面倒だと思う自分を否定できない。

「本当？　じゃぁ、お昼くらいから映画を見て、クリスマスディナーを食べに行きたい！」

思いっきり嬉しそうに笑いながら言ってやった。心では、クリスマス前に別れよう、と考えながら。

慎一君は、一瞬すごくびっくりした顔をして、その後、そうだね、とつぶやくように言った。

その後、冷めてしまった未開封の缶コーヒーをかばんにしまい、立ち上がって。

「明日も仕事があるから、そろそろ帰るよ。見たいもの決まったらメール入れて」

「わかった。気をつけてね」

駅に向けて歩き出す慎一君を、ベンチに座ったまま見送った。いつもなら、駅のほうまでついて行ったけど、そんな気はおきなかった。

慎一君の背中を見ながら、どうやって別れようかを考える。

あれだけ好きだったのに、と思わなくもないけど。でも、別れる、と決めただけでかなり心が軽くなった。

きっと、刷り込みに近い感情だったのかもしれない。好きだったのはまだ純粋に幸せだった初めのころだけ。後は、嫌なことはすべて自分を変えることで抑えて、幸せだと思い込もうとしていた。

「愛海に報告しなくちゃ」

慎一君の事を考えているのに、ここまで感情が動くのは久しぶりだ。

新しくなった自分を感じながら、立ち上がって、公園を出る。

クリスマスの約束をしておいて、クリスマス直前に別れるのは、今までの事に対するちょっとした仕返し。これくらいは許してもらおう。

公園から徒歩15分くらいの自宅へと向かう。

なぜかスキップをしたくなるような、そんな夜だった。

第五話　クリスマス事件　前編（後書き）

ものすごい季節外れで申し訳ないです。
昔やってた小説ブログにのせていたものが出てきたので、一切修正を加えずにのせてみました。
これ、当時は3話完結だったのですが中編と後編を加筆修正して二話完結にしようかと思います。
で、第五話完結後に、恋愛短編集を完結設定させていただこうと思います。

第五話　クリスマス事件　後編

『ごめん、急に仕事が入って。今日のデート、違う日に回して』

クリスマス前に別れるつもりが、なかなか慎一君と会えず。
電話やメールじゃなくて直接言ってやりたかったから。デート当日に待ち合わせ場所に来た慎一君を振ってやろう。
そう意気込んで迎えたクリスマス。慎一君との仲直りのデートの日。

待ち合わせ時間を15分過ぎたときにかかってきた慎一君からの電話。
断られることはわかっていた。だって、私は知っていたから。

＊＊＊＊＊

「……ありえないでしょ」

デート当日、待ち合わせ時間を過ぎてからのドタキャン。しかも、慎一君から。

「私のことをないがしろにしすぎじゃない……」

雪が降るほどでもないけれど、十分に寒い真冬の駅前。仮にも彼女を待たせといて、メールで、簡単にデートを断る彼氏。字面は最

低だ。
そんな最低な彼氏でも、向こうからのドタキャンという最後の最後まで最低な慎一君の態度にショックを受けはしたけど。
別れる、と決めていたからか、そこまで気持ちが沈んだりはしなかった。ただ、これからしばらくの時間をもてあましてしまうから、どうしよう、と思うだけ。

「……居酒屋とかって、クリスマスだから空いてるのかな？」

今日はとことん飲んでやろうか。で、明日になったら、スッパリと慎一君と別れてやる。
そんなことを考えていたら、雨が降り出した。
ホワイトクリスマス、なんて事になったら、クソくらえ！　って叫んでたかもしれないから、気分的には雪よりまし。でも、身体的には雪のほうがよかったかも。雨って、すぐにびしょびしょになるから。

「最悪、傘もってない」
「僕は傘を持ってますよ。それから、空いてるかはわからないけど、穴場の良いお店も知ってます」

独り言に答える声。それと同時に、頭上の雨がやんだ。誰かが横に立って、傘を差し出してくれている。

「こんばんは、浅賀さん」
「こ……んばんは。……井上君」

会社の同期の井上君。同期、といっても井上君は営業の外回り。私は総務。接点なんて、ほとんどない。
そんな井上君は私の返事も聞かずに私の腕をとって歩き出した。

「……井上君？」
「浅賀さん、クリスマスですよ？　一人より、二人のほうが楽しいですって。運の良いことに、僕は今彼女のいない寂しい独り者ですから」
おどけたようなその言葉は、自然と私を笑顔にさせる。思わず笑い声が出てしまって。
「あ、笑った。さっきから、寂しそうな顔してたから、気になってたんです。行きましょう」
「……うん」

優しい笑みを浮かべた井上君が、一度私の腕を放して再度手を差し伸べてきた。
私は思わず、反射的にその手をとった。
井上君は、少しびっくりした後「ここからなら5分くらい歩けばすぐですよ」と言って、つないだ手を引き寄せた。
慎一君に、罪悪感が無いわけじゃないけど。
でも、慎一君が合コンの誘いを断らず、私との約束を断ったのを知っていた。
つくづく救いようの無い私の彼に、遠慮をする必要なんか。

「そうですよ。僕、浅賀さんの彼とは知り合いなんです。仕事上の。……僕が言うのもなんですけど、やめたほうがいいと思います」
「あれ？　声に出てた？」
「はい、ばっちり」
「……わかってる……んだけど……なんでだろう？　今日はこっぴどく振ってやる！　って決意したけど、結局成功しなかったし。……なんか決意しないと行動に移せないってことはまだ未練があるの

かなぁ？」
「一度決意したのなら、僕が協力します。……だけど、せっかくのクリスマスですから、そんな嫌なことを忘れて、楽しみましょう？」
そういった、井上君の顔は、すごく楽しそうで、魅力的。
なんとなく、嫌なことも忘れられそうな気がした。

＊＊＊＊＊

目が覚めたら、知らない天井があった。
「……？　……えっ！？」
びっくりして飛び起きた。寝ていた場所は知らないベッド。
ベッドのすぐしたでは、井上君が仰向けで眠っている。その手には、空だと思われる、ビールの缶。
よく見れば、コタツの上、ゴミ箱、床、いろんなところにポツポツと転がっている。
生活感のある空間の中に井上君がいる、ということは、ここは井上君の自宅なのだろう。この部屋は、男の人にしてはそこそこきれいで、余分なものが一切無い。そんな部屋に、何でいるのかは記憶が無いからわからない。
「……何にも、無かったよね？」
他人ではない。だけど、友人とまではいかない異性と二人きりで、

朝。
思わず自分の服装を確認した。
慎一君とのデートのためにきていたセーターとスカートはすごくしわになっていたけど、しっかりと身につけている。もちろん、タイツも。上着は、たぶん井上君がしてくれたのだろう、きれいにハンガーに掛かっていた。

「よかった、何もなかったっぽい」
「大丈夫。僕、酔った勢いとか、その場のノリとか、そういうの嫌いですから」

いつの間に起きていたのか、井上君は、ベッドの上でワタワタしていた私をじっと見ていた。

「おはよう、浅賀さん」
「……おはよう、井上君。私……昨日……？」
「記憶飛んでますか？　結構飲んでたから。二日酔いは？」
「うん、ちょっと頭痛いけど、それほどでもないかも。……あの、ごめんね？」

私の謝罪に、起き上がって空き缶を集めていた井上君が、不思議そうにこちらを見た。

「何への謝罪？　僕、謝られる様な事されてないですよ？」
「記憶は無いけど、たぶん、迷惑をかけてるから……」

その言葉に、井上君は小さく笑って、手に持っていた空き缶をビニール袋にまとめた。

「たぶん、謝らなきゃいけないのは、僕のほうです」

そういって、私へと手を差し出す。
その上に乗っているのは、私のケータイ。
「飲み屋から出た帰りのタクシーで、浅賀さん、寝ちゃって。僕、あなたの家は知らなかったから、とりあえず、ここに運びました。その後、目を覚ましたあなたと、またここで飲んでたんですけど……」
渡されたケータイを開く。特に変わったところは無い。
「ものすごい頻度で、ケータイがなって。相手はみんな同じみたいで。浅賀さん、その名前を見て泣くんです。どうして、って」
「……」
着信履歴を出してみる。3分おきくらいの間隔で、延々と続く慎一君の名前。
「別れたいって、泣きながら。僕に、今まであったことを話して、それで、浅賀さん、本当に眠ってしまって」
「……」
「僕、昨日、浅賀さんの彼があなた以外の人と遊びに行くこと、知ってました。待ちぼうけをくらってる浅賀さんを見つけたのは、偶然ですけど。でも、チャンスだとも思いました」
続いて、メールの受信箱。30分おきくらいに、誰といるのか問うメールが続いている。延々と。
「それで、浅賀さんの口から話を聞いて、あなたは寝てしまって、そのケータイは鳴り止まなくて……」

そういって、井上君の目線は、ケータイから私へと移る。
目が合った。
井上君はとても真剣で、だけど、どこか苦悩しているように見えた。

「思わず、ケータイを手にとって、話しました」
「……慎一君と？」
「はい。……すみません。僕、浅賀さんの事、入社した時から好きだったんです。浅賀さんは知らないみたいだったので黙ってましたけど、僕は慎一と同じ高校出身で、慎一はその当時からの友人です。彼は、貴方と僕が同じ会社に勤めている事を知って、僕が貴女に惚れているのを知ってから、まるで見せびらかすように貴方が慎一に向ける愛情の話をして、あなた以外の人としたデートや浮気の話をするんです」

井上君の告白は衝撃的だった。……井上君が私に好意を持っていた事も、慎一君との関係も。昨日の慎一君の行動を知っていたことも。

「僕は、すごい罪悪感でいっぱいだった。……浅賀さんを前にして、何も知らないフリをし続けて。僕は、あなたと対等ではいられなくて。思わず、敬語で話してしまうくらい。けれど、いい加減、動こうと思ったんです。浅賀さんは幸せそうじゃないし、慎一は、いい加減だったから」

だから、彼と、あなたのケータイで話しました。
重罪を告白するかのような声だった。

＊＊＊＊＊

「どういうことだよ」

私が呼び出して、待ち合わせしていた、あの公園へやってきた慎一君は、会うなり不機嫌を隠さない声でそういった。

「それは、私のセリフだと思う」

今日の私は、ものすごく強気で、普段からは想像ができないくらい冷ややかな声が出た。慎一君は、びっくりした顔でこちらを見る。

「でも、別に説明を聞こうとは思わない。慎一君とは別れたいから。嫌とは言わないでしょ？　だって、私なんていてもいないようなものだったから。彼女なんて、名前だけだったでしょ？」

慎一君は、何もいえないみたいで、一度声をつまらせた後、視線をそらした。

浮気現場を目撃したこと。しおらしく言い訳していたこと。浮気なんかしょっちゅうだったこと、井上君に浮気を自慢していたこと。デートをすっぽかされたこと。段々と一方的な関係になっていた私たち。

井上君は、私にとって良い起爆剤になったと思う。今まで感じていた事を慎一君に伝えることは無いけど、別れを切り出すことができた。

「全ての原因が慎一君にあるとは思わない。だけど、お互いが努力しなくちゃいけなかったと思う。井上君は、良いきっかけをくれた」

「……」

慎一君は、今度も何も言わず、黙ったまま。そのことに、多少の悲しさはあるけど、でも、それでよかったとも思う。

「……本当に好きだったから、付き合い始めた。それは、本当」

「そっか、今までありがとう」

「……ごめん」

慎一君の言葉は、ここ最近では一番誠実で、嘘が無かった。

私は、笑顔で手を振って公園を出た。笑ったのは、たぶん私のプライドだと思う。

＊＊＊＊＊

自宅に帰ってから、井上君にお礼を言わなくちゃ、と思った。それから、部屋をきれいにしよう、とも。……思ったけど、なかなか動き出せなくて、ベッドへごろりと転がる。

そのまま、寝てしまおうかと考えているときに、ケータイがなった。相手は、知らない番号。

「……はい？」

『浅賀さん？　井上です。……勝手に慎一から電話番号聞いてすみません。……あの、慎一から連絡が来て、別れたって……たぶん、浅賀さんは傷ついてると思ったから……』

「ありがとう、井上君。別れを切り出せたのは、貴方のおかげだよ」

知らずに涙が頬を伝った。

大学時代からの長い付き合いだった慎一君。すっぱり別れると決

めてから、切り出せずにいたのは、やっぱり心のどこかで好きだったから。
でも、別れて、すっきりした。きっと、慎一君のことで泣くのはこれが最後。

『まだ、好きでしたよね？　だから、無理強いしたかなって思ってて……』
「……確かに、少しは心が残ってたけど。でも、すっきりした。井上君のおかげ。ありがとう。井上君がいたから、私、一歩踏み出せたと思う」
『……浅賀さんが好きです。だけど、付き合うより、まず、あなたと対等になりたいと思っていました』

『僕は、対等になれたのかな？』
「うん、井上君は、はじめから対等だよ。……今すぐに付き合うとかはちょっとできないけど、でも、まず、親しい友人として始めていきたいと思ってる」

私はたぶん、井上君に惹かれると思う。だけど、すぐに動き出せるほど切り替えが早くは無いから。
私の提案を、井上君は笑って了承してくれた。

それから、私たちはまずは友人としての付き合いが始まった。
対等を求めていた井上君は、なかなか敬語が抜けずにいる。
「だって、好きな人の前にいるから、緊張するんです」

第五話　クリスマス事件　後編（後書き）

異常で五話および恋愛短編集完結と相成りました。

この作品も未熟さが多々残ってますが、なんとなく愛着があります。

なので完結させる前にここにのせたいと考えていました。

読んでくださった皆様、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7996l/

恋愛短編集

2011年8月20日12時48分発行